サイエンスにおける私にとっての日本語

東原和成

昭和が終った年，バブル絶頂期目前の時代，筆者は学部卒業後すぐに米国の大学院に留学した．そのころは，インターネットもなく，ようやくコンピュータが普及しだしたころであり，唯一，日本語の活字にふれることができる場所は図書館の新聞コーナーだけで，そこは同時に，留学中の日本人との“出会いサイト”でもあった．その7年後，米国留学に終止符を打ち帰国した．いろいろな人になぜ米国に残らなかったのかと聞かれた．ある確固たる意思があって帰ってきたのだが，どんな理由もどこか自分のなかの本当の理由とは違うような気がしていた．そんななか，最近，やはり米国生活が長かった数学者の藤原正彦氏が出した本『国家の品格』(新潮社，2005)のなかに，筆者の心の奥底に眠っていた日本に帰国した本当の理由がまさに適確に表現されているのを発見した．それは，“論理より情緒，民主主義より武士道，英語より国語”という視点である．

筆者は，日本の大学では体育会でテニスばっかりやっていてろくに勉強をしなかったので，ほとんどの知識を米国の大学院で得た．すると，英語で覚えた知識を使って英語で考えるよう必然的になっていたのだが，ポスドクの生活も終盤にさしかかり，米国で独立するか日本に帰国するか悩み，自分の将来的な研究の方向性を考えていたころ，高度で複雑な考えをしようとすると，自分の英語思考回路があるところで止まってしまうことにふと気づいた．外国語としての英語力の限界である．そこで，日本語で考えようとしたところ，科学単語を英語で覚えているので日本語でも考えられないというジレンマにはまってしまったのである．これはどちらか選ばないと自分を失うと思い，そして，選んだ国語は母国語である日本語である．—外国語より母国語—

もっとも，サイエンスの共通語は英語だから，英語力が勝負であることは当然である．そのためにラボの公用語は英語としている日本の研究室もあると聞く．しかし，米国内ならまだしも，わが国でサイエンティストを育成するためには，そのような方針は逆効果であると思う．筆者は，米国大学院の経験者だし，某英会話本などを出しているので，「先生のところでは，修士論文は英語で書かせて英語教育をしているのでしょうね」とよくいわれるが，そんなことはなく，英語で書きたいという学生にも修士論文は日本語で書かせて，真っ黒になるくらい添削をする．日本語のできない日本人に英語なんてできっこない．もちろん，母国語を英語とする米国人のなかにもちゃんとした英語が書けない人がたくさんいて，米国人でも論文をEnglish editing(英語添削)に出すくらいだ．サイエンス英語は論理性が大事だが，母国語である日本語をきちんと書けて，母国語できちんと話せて，はじめて美しい英語の論文が書けたりディスカッションできたりするのだと思う．—語学力は国語力—

10年ほど前までは，数週間に最低1日は図書館にこもり，ジャーナルを読み，必要な文献をコピーするという作業を必ずしていた．いまはインターネットを通じて自分のコンピュータにいつでも論文をダウンロードすることができるが，自分の領域の論文，すなわち，キーワード検索でひっかかってくる論文だけしかみない．図書館通いの時代は，すぐとなりの論文をみて偶然にアイデアが浮かんだり，ときには普段手にとらない雑誌をちらちらみることによって自分の興味が広がったりして視野が広がるときが多々あった．インターネット・コンピュータ時代で失ったもの，それは，活字を読み，想像力をはたらかせ，自分で考えるプロセスではないかと思う．印刷された活字を読むのと，コンピュータ画面上で字を

Kazushige Touhara

Profile

1993年 米国 ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校博士課程 修了，1996年 東京大学医学部 助手，1998年 神戸大学バイオシグナル研究センター 助手を経て，1999年より東京大学大学院新領域創成科学研究科 助教授．

読むのでは，使う思考回路はまったく違う．文章の校正をするときに，液晶画面上では気がつかない誤字をプリントアウトしてはじめて気づいた経験をもっている人も多いだろう．—液晶より活字—

最近，ノートをとることが苦手な大学生が増えたと聞く．コンピュータ時代の負の産物とも考えられるが，どうも講義体系の変化が原因ではないかと思う．一昔前までは，プリントを補助資料として板書で講義をした．いまは学生からの評判もいいためか，パワーポイントで講義をする場合が多い．板書の講義では，聞くほうも能動的に頭をはたらかせながらノートをとる．一方，パワーポイントによる講義は，綺麗にアニメーションもできるので視覚的にわかりやすいことは確かだが，聞くほうは受動的にしか頭をはたらかせない．汚い字の板書を読み解くために想像力をはたらかせてノートをとり，先生のまとまりのない言葉を自分の言葉に落とす作業は，一見，効率が悪いようで，実は，論理的な思考の育成に役にたっていたのではないかと感じる．講義が面白くなったことによって想像力の育みが失われるとはなんとも皮肉なことではないか．ここでも失われつつある活字のパワーを感じざるをえない．—パワーポイントより板書—，という筆者も去年くらいからついパワーポイントに頼りがちでよくないと思っているのだが．

さて，米国にいたときに，米国にはなくて日本にあるものでとてもいいなと思ったのは，母国語の一般科学雑誌が多くあるということである．『ニュートン』など一般市民や中高校生向けの科学雑誌から，いわゆる『蛋白質 核酸 酵素』を代表とする研究者向けの雑誌まで，様々なレベルの科学雑誌がたくさんある．米国では，*Scientific American*（日本語版：日経サイエンス）がそれに相当するが，わが国のように母国語で書かれた科学雑誌がたくさんあって，それらを読むだけで様々な分野の最先端を知ることができる国はほかにないと思う．もちろん，英語総説を読めばいいじゃないかという意見もあると思うが，母国語でしか伝わらないニュアンスというものがあり，筆者も日本語で執筆するときは英語では表わせないような母国語の力をふんだんに織り込むように心がけている．そして，これらの科学雑誌を読んで，多くの学生がサイエンスに夢を感じてこの世界に入ってくる．また，新進気鋭の若い研究者の存在にも気づくことがある．そして，なによりも活字にすること，活字を読むこと，そのプロセスをつうじて駆け出しの大学院生が想像力を膨らませる．一昔と違って，ブログなどで意見をリアルタイムで発信できる現代において，われわれは活字として印字される文章を読むことによる脳への影響力の多大さを再確認するべきである．逆にいえば，活字として情報や知見を発信する出版社側も，実はとても責任がある立場にいるということを再認識する必要もある．

米国の図書館の隅で日本語の新聞を読み，英語で飽和した頭が癒され，その喜びのなかに自由な発想が育まれたころを思い出しては，いま，活字離れが進む現代に，活字の大切さを思う．筆者にとっての米国大学院留学というものは，美しい日本語と国語の大切さの再確認のきっかけであり，武士道的発想で欧米に英語論文を発信していきたいという，眠っていた日本人魂をよび起こしたものであった．もし，もう一度大学院生をするとしたら日本と米国のどっちを選ぶ？と聞かれたら，間違いなくまた米国を選ぶだろう．ただ，帰国という選択肢は自分のなかのアイデンティティの置き場所を模索した結果である．現在，捏造などで問題になっているサイエンティストとしての品格の低下を危惧しながら，もっと大事なものが，インターネットの時代，活字離れによって失われつつあるのではと心配になる今日このごろである．
（美しい日本語の活字を半世紀に渡って印字しつづけてきた『蛋白質 核酸 酵素』の50周年記念特集に寄せて，2006年5月22日）

追記：実は，執筆テーマは“過去”“現在”“将来”“自由題”のいずれかを選択ということであったが，過去や将来を語れるほど研究者として確立していないし，一匹狼としていまだ不安定な立場で現在を語るほど余裕はない．そこで，英語英語とうるさい世の喧騒のなか最近切に思う国語力について書いたところ，結果的に自分の過去やいまの話になってしまった．一方で，研究についてなにも語れていない．東原ってなにをやっているどこの何者？という方も多いと思うが，『生化学』2005年12月号に“多事争論”的な執筆をしたので，参考にしていただきたい．図書館にいくのが面倒くさいという現代人は，“別刷希望”と，touhara@k.u-tokyo.ac.jpまで．また，ホームページを参照されたい．